戸の外から叩く主　　ヨハネの黙示録３章２０節

細井　茂徳

教会の暦では、今日から待降節・アドベントに入ります。この時期になると、町の色んな所でクリスマス色に彩られて喜びを表現します。しかし教会では、喜びを再確認するというだけでなく、それと共にキリストが再び地上に来られる【再臨】を覚える時として過ごします。

今朝の聖書箇所ヨハネの黙示録３章２０節の主イエスの御言葉は、正にそうしたことを思い起こさせるものです。主の再臨を迎えんとする私たちに、扉を開くようにと促しているのです。ここに出てくる「***扉***」、それは私たちの心を表しているのでしょう。人の心は本人が内側から開けなければ、誰もたとえ神でも開けることはできません。だから主イエスは「***戸口に立って***」、外から扉を叩いている、叩き続けておられるのです。開かれるのを今か今かと待っておられるのです。主イエスを迎えるかどうか、それは信仰の応答だからです。

今朝の箇所を通して示されますことは、特に主イエスが外から扉を叩き続けておられるのは、主はあなたを諦めていないということ、あなたのことをどうでもいいとは思っておられないということです。主イエスは、家にこもっている私たちを無理に引きずり出すために扉を叩いておられるのではありません。そうではなく、開けられた扉の「***中に入って***」、「***共に食事をする***」ために、そうされるのです。

イエスさまを心の内に入っていただくとき、私たちはきっと、人知を超えた癒やしを与えられ、他の何事によっても得ることのなかった真の平安に満たされることでしょう。主ご自身が命のパンを用意して、あなたを礼拝の場に迎え入れて、一緒に食事をしてくださいます。この天の食卓に、あなたもあなたの家族・知人友人も招かれています。